慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	畏友永澤君を失う
Sub Title	
Author	前原, 光雄(Maehara, Mitsuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1972
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.45, No.6 (1972. 6) ,p.127- 129
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	永澤邦男先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19720615-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ごしなどを見ても、全くの紳士であつたが、同時に彼は非常に強靱な意志と実行力の所有者であり、所謂心の強い人であつた。彼のこれらの特性は外国生活に教ぶ所が多かつたと同時に、先祖より与えられたものであろう。彼は有名な近藤重蔵の子孫であることも、その一証となるであろう。彼は近藤の伝記を書くことを望んでおり、また資料も実際に集めていたとの事である。彼に暇を与えて先祖の伝記を書かしめたかつたと思う。

外つ国に友は逝きたり菜種梅雨

畏友永澤君を失う

前原光雄

ニューヨークのホテルで起つた永澤君の悲報を聞いたとき、私の四十八年間の同君との交友を通じて私の心に焼きついていた頑健な姿を思い起し、誤報ではないかと疑つた。しかし、その反面において、健康に対する自信過剰ともいえる同君の日常の生活も同時に回想せられて、「やつぱりやられたか」と思つた。永澤君はヴィタミン剤は飲んだり注射して貰つたりするが、私の知る限り血圧を計つてもらつているのを見たことがない。私が「血圧は幾つですか」と聞くと、「計つたことがないから知らない」というのである。高血圧を気にしている私は、血圧をときどき計ることを勧めたが、いつこうにききめはなかつたようである。聞くところによると、ニューヨークでの検査の結果、コレステロールが普通の三倍もあり、血管の四分の三はコレステロールでふさがれ、血液は血管の四分の一の部分しか通つていなかつたとのことで、ふだんこの方面の検査をし、治療していたら、と惜しまれてならない。

顧みれば、大正十四年に私が法律科を卒業して以来、四十八年間一方ならぬ庇護と温情に浴した。この間の想い出は枚挙に遑がない。一冊の書を成すに足るものがある。その中で最も印象の深いものの一つとして昭和二十三年に私達に住居の世話をしてくれたことがある。戦災で茨城県の田舎に疎開していた私は東京都が廃墟となつたために慶應に通うことができる距離に住居を見付けることは不可能なことであつた。私は木金の二日に時間割を組んでもらつて、木曜の朝はたいてい午前三時に起き、五時の始発の汽車に乗り、田町に着くのが九時半頃で、十時からの講義に丁度間に会うのである。そしてその晩は友人の

家に泊めてもらつて、翌日の金曜に講義して茨城に帰るようにしていた。大体金曜の午後九時頃に着くのである。たまに列車が途中で立往生をして、夜中の二時頃帰つた時も何度かあつた。このような状態の私であつたので、永澤君の好意により、東生田に私達の住居を提供せられたことは、例えようのない喜びであつた。その頃戦災で失つた日吉の校舎を補充するために、小田急の東生田にあつた旧陸軍の技術研究所の跡を慶應で借りて、それを法学部と医学部の予科の教室として使用していたのであつた。私の住居は、この研究所の中にある車庫を改造して作られたものであつた。なぜ学校が私のために住居を準備したかというと、敗戦後日本の学制が変り、新しく高等学校を設置する必要に迫られ、私は、慶應高等学校の初代の校長に擬せられていたためである。ところが私は昭和二十三年三月十八日（？）に発表せられた公職追放委員会で文筆家として追放の仮指定をうけた。一方において、私は自分の新任務につくために準備を整えており、三月二十一日に東生田に移転して来た。この追放の仮指定のために、或いは教職を去らねばならぬかも知れないことになり、従つて、高校々長に就任することができなくなつた。そこで、結果的には学校が公費をもつて私のために住居を用意したことになり、これに対する責任追及の鋒先が永澤君に向けられ、二三の教員が永澤理事の部屋を訪ね、口を極めて非難し、永澤君は彼等の詰問と罵言に堪え、後で悲憤の涙を流したのである。これは皆、私のために起つた事件であつて、永澤君の苦衷を察すると何と言つてよいか、感謝の言葉もない。このことは深く私の心に刻み込み、終生この恩は忘れることはできない。その他私のために示した数々の友情と厚意は、ここにいちいち挙げることは出来ないほどである。

次に述べたいことは、人間として大きな成長を遂げたことである。自分の専門分野においての学問的成長というよりも、私は人間として大きく成長したことを強く感ずる。また私達の助手時代に、当時慶應義塾の監事をして居られた石田新太郎氏が逝去された。永澤君と私は一緒に石田邸にお悔みのために伺つた。そして二人でお悔みを述べて外に出ると、永澤君は、「僕はもう駄目だ」と悲痛な叫びをあげたのである。何がもう駄目なのかと不思議な顔をしている私を見て、「僕は先生によろしくと言つてしまつた」と言うのである。死んだ先生に対し、よろしくとはおかしなことであるが、この言葉が相手方にはつきり聞こえたかどうか。別れるときによく出る、言葉がつい出たに過ぎないので、大して気にするに当らないと思うが、「僕はもう駄目だ」という言葉の内容は、これほど落着きがなく、無意識に不適当な言葉が飛出すようでは、人間的に駄目だという意味であろう。しかし、その後の人間的成長は大したものであ

る。何がこのような成長を齎したか。その重要な要素としては、潮田塾長の下において十年間常任理事の仕事を担当したことであると思う。この間私大連盟の副会長として他の私大の幹部と接触し、塾内外の仕事に貴重な経験を積んだのである。昭和四十年以来、四年間塾長としての重責を果したのも、その前の十年の修業が物を言つたものであろう。常任理事としての十年の苦労が実を結んだことは、ある時私に告白したことがある。いずれにしても大した成長ぶりである。助手時代の同君を見ているもので誰がこのような政治家的成長を予想することができようか。私学の経常費に対し国庫助成を実現させたことも同君の顕著な功績の一つであろう。また昨年以来、私学振興財団の初代理事長として、財団を整備した功績も大きい。奥様も「永澤は政治家ですよ」と何度か言われたことを記憶している。私学経営が困難でますます国家の助成を必要とするときに、同君を失つたことは、私学のために大きな損失である。

永澤先生を憶う

伊東　乾

陽春四月、この大切な先生の逝去に遇おうとは、夢にも予想しないことであつた。つい先頃お目にかかつた折には、例の、喉にからまる痰の音さえきれいに消えて、健康は上乗と語つて居られたのである。左右に強く張つた顎角、分厚すぎる程に分厚な眼鏡、ゲルベ・ゾルテの紫の煙……。すべてが突如として消えた。とても信じ難いというそんな想いも、さすがに葬儀を了えてみると、やはりもう先生は居られないと確認され、やりきれないような諦めに変わつた。

先生によつて、私は、眠り込もうとしていた自分自身の或る一面を目覚めさせられ、小さく固まろうとしていた私自身を押し拡げられた。先生の辱知を蒙つたことは、私にとつて、まさに貴重な人生の出逢いであつたと思う。

初めて親しくお話を申上げたのは、もう三十年近くも昔にな